ゼネラルマネージャー離任の挨拶（早稲田大学キャンパス・アジア EAUI プログラム）

松岡俊二

関係の皆様

早稲田大学アジア太平洋研究科・松岡です。「アジア地域統合のための東アジア大学院（EAUI）拠点形成構想」（早稲田大学キャンパス・アジア EAUI プログラム＊）につきましては、日頃、何かとご支援・ご協力をいただき、誠にありがとうございます。私は、本構想作成以来、約 2 年間、構想調書作成の責任者および本プログラムのゼネラルマネージャー（GM）をつとめてまいりましたが、このたび 3 月末をもちまして、GM を離任することとなりました。遅ればせながら、関係の皆様の今までのご厚情に感謝しつつ、GM 離任の挨拶をさせていただきたく、メールをいたしました。いささか長文で失礼ではございますが、さる 3/28（木）に実施しました本事業の第 1 回第三者評価委員会の GM 閉会挨拶文をもちまして、皆様への GM 離任の挨拶にかえさせていただきます。今後は、一学者として引き続き東アジア大学院（EAUI）設立構想を提唱してまいります。引き続き宜しくお願いいたします。

＊プログラム HP
http://www.waseda.jp/gsaps/eaui/introduction/greeting.html

2013 年 3 月 28 日
早稲田大学アジア太平洋研究科・教授
キャンパス・アジア EAUI プログラム・ゼネラルマネージャー
松岡　俊二

キャンパス・アジア EAUI プログラム・ゼネラルマネージャー離任の挨拶
— 第三者評価委員会（2013.3.28）閉会の辞—

早稲田大学キャンパス・アジア EAUI プログラム・第 1 回第三者評価委員会の終了に当たり、今日が私のゼネラルマネージャー（GM）としての最後の公式の席になりますので、GM 離任の挨拶も含め、第三者評価委員の皆様、また特に事務所の皆様の日頃の本事業へのご尽力へのお礼も含め、閉会の挨拶をさせていただきます。

最初に、私が本プログラムを去ると、このプログラムの最初から責任を持って係わってきた人間がいなくなりますので、少しプログラムの生い立ちからお話ししておきます。

本キャンパス・アジア EAUI プログラムは、2011 年の 5 月に文科省の公募要領が公開され、2011 年 5 月末から早稲田大学アジア太平洋研究科内に設置された共同教育研究事業検討委員会において検討が開始されました。私はその委員長、責任者として調書をまとめ、2011 年 7 月 22 日に文科省へ提出、2011 年 9 月 12 日に一次選考（書類審査）を通過し、2011 年 9 月 21 日午前 10 時から最終ヒアリングが約 35 分行われ、私がプレゼンをし、全ての質問に答えました。2011 年 11 月 1 日に正式な採択通知があり、1 位通過との情報も得ました。

審査委員会の関係者からは、その後、「松岡さんのところは、他のありきたりの学生交換ではなく、東アジア大学院設立構想という大きな夢を描いていて、審査委員の皆さん、大変高い評価でした。やはり事業には夢がないとだめだよね」と言われたことを思い出します。その後、2011 年 12 月 15 日に最初のプログラム事務局会議を開催し、本プログラムは正式にスタートしました。

このように、本プログラム・東アジア大学院（EAUI）構想は、まさに東日本大震災と福島原発事故の影響が色濃く日本社会を覆っていた時期に形成されました。構想の精神的原点・初心は、東日本大震災と福島原発事故であり、特に今日もご紹介しましたが『敗北を抱きしめて』の歴史家ジョン・ダワーの大震災後の日本社会へのメッセージに触発されたものでした。

「個人の人生でもそうですが、国や社会の歴史においても、突然の事故や災害で、何が重要なのか気づく瞬間があります。すべてを新しい方法で、創造的な方法で考え直すことが出来るスペースが生まれるのです。関東大震災、敗戦といった歴史的瞬間は、こうしたスペースを広げました。そして今、それが再び起きています。しかし、もたもたしているうちに、スペースはやがて閉じてしまうのです。既得権益を守るためにスペースをコントロールしようとする勢力もあるでしょう。結果がどうなるか分かりませんが、歴史的節目だということをしっかり考えてほしいと思います。」（『朝日新聞』2011 年 4 月 29 日付け）。

環境経済やアジアの環境協力を専門とする私にとって、福島原発事故は強烈なショックでした。自分が長年携わってきた大学や学問のあり方が根本的に問われていると感じ、大学人として、すべてを新しい方法で、創造的な方法で考え直したとき、これから何をなすべきか考えました。

2011.3.11 の福島原発事故の教訓は、社会的問題の処理を一部の権力者や専門家だけの閉じた共同体にまかしておいては、とんでもなく大きな社会的災厄をもたらすということであり、無能なトップと優秀な現場（ボトム）という日本社会の組織的病（やまい）

を根本的に治癒しない限り、1931 年の満州事変に始まり太平洋戦争を含む 15 年戦争の敗戦、2011 年の福島原発事故と繰り返されてきた世界史レベルの過ちを、日本社会は繰り返すことになるということです。日本の社会科学者として、何かをすべきだ、何かをしたいと強烈に考えてきました。

希望や未来を感じることの少なくなった日本社会で、大学はもっと積極的に組織や雇用のあり方も含めた未来の社会モデルを研究開発し、世界に提示すべきではないのか。その有力な回答が、アジアと手を携え日本社会の再生のための知的プラットフォームを東アジア大学院として設立するというアイデアでした。

大震災・福島原発事故から 2 年がたち、本事業を開始してから約 1 年 4 ヶ月がたち、何かが変わったのか、我々は何かを新しい方法で、創造的な方法で変えることが出来たのか？自問自答しながらこの 2 年間、日夜、努力を続けてきました。

『新約聖書』マタイ伝第九章の一節に、「新しき葡萄酒を古き革袋に入ることは為（なら）じ。もし然（しかり）せば、袋張り裂け、酒ほとばしり出（で）て袋もまた廃（すた）らん。新しき葡萄酒は新しき革袋に入れ、かくて両（ふたつ）ながら保つなり」とあります。世に言う「新しき酒は新しき革袋に盛れ」ということです。

東アジア大学院構想という新しい酒（夢）を入れる新しい革袋とは何なのか？どのように考え、実践していけば良いのか？試行錯誤をしながら、全身に風圧を感じながら全力で走ってきこの 2 年の日々でした。

今、夢を実現させる途中で、志（こころざし）半ばで、本事業の GM をやめることになりますが、私は個人の研究者として、学者として、市民・国民・アジア人として、日本やアジアの同志とともに、引き続き東アジア大学院構想の提唱を続け、福島原発事故に象徴される日本の使い捨て組織や使い捨て社会の根本的改革のために、働きたいと願う人が働き続けられるような未来に希望の持てる公平で持続可能な社会の実現に向けて闘い続けていく所存です。

早稲田大学の卒業生の一人に村上春樹という作家がいます。彼は、2009 年のイスラエルにおけるエルサレム賞の受賞スピーチにおいて,「堅く高い壁にぶつかる玉子があるのなら,私は常に玉子の側に立つ（"Between a high, solid wall and an egg that breaks against it, I will always stand on the side of the egg."）」と述べました。

今年の 1 月に福島のいわき市および双葉郡の調査に行きました。福島の人々から、「先生、福島を研究することは、人類社会を研究することだと思うのです。先生の提唱されている東アジア大学院を、是非、福島につくって下さい。福島の我々も、アジアと、そ

して世界と手を携え、福島と日本の社会の再生を実現したいと考えています」と言う言葉を私は生涯忘れません。これからも、東日本大震災・福島原発事故で被災された人々や困難な中で未来への希望を求めるアジアの人々とともに、東アジア大学院構想の実現のためのいばらの道を歩んでいきたいと考えています。

第三者評価委員の方々の中には、これが最後の一期一会となり、今日でお別れという方もいるとは思いますが、本日は誠にありがとうございました。

最後に GM を支えていただいた、キャンパスアジア事務所の皆さんには、心より感謝申し上げます。嘱託職員・派遣職員という非正規雇用（いやな言葉ですが）にも係わらず、努力を惜しまずに努力をし、事業を支えていただき、本当にありがとうございました。皆さんの待遇・雇用条件以上の努力や働きに対して、GM として必ずしも十分にお応えすることができなかったことをお許し下さい。

委員の皆様、ご出席の皆様、本日は長時間の委員会へのご出席、さらには今までの皆様の本事業に対するご支援・ご協力につき、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

以上